

別紙1-1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名 TAN Shir Ley

論 文 題 目

The explication of cultural scripts of Japanese classrooms through bansho analysis

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 柴田好章

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 渡邊雅子

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 服部美奈

論文審査の結果の要旨

本研究は、日本の授業に特有の「板書」に着目し、Stigler と Hiebert の文化スクリプトの概念に依拠し、小学校の授業の基盤となる文化的スクリプトを解明している。理論的枠組みとして文化歴史的活動理論(CHAT)を用い、板書の分析によって、教師・児童の教室での活動を促進する文化的スクリプトを明らかにすることを目的としている。このために以下の課題を設定している。(1) 板書の過程における教師の意思決定の原則の解明、(2) 板書の分析手法の開発、(3) 教科による板書のスタイルの違いの解明。

第1章では、本研究における基本的概念である文化的スクリプト、板書の定義が明らかにされ、教室での実践を改善する上では文化的スクリプトを理解することが重要であるとの問題意識が示され、本研究の目的が提示されている。

第2章では、本研究の理論的枠組みである文化歴史的活動理論 (CHAT) や、文化的スクリプト、そして板書に関して先行研究を詳細にレビューし、日本に固有の板書を CHAT を枠組みとして分析することにより、暗黙のうちに作用している文化的スクリプトを明らかにする上で有効であることが示されている。

第3章では、本研究における方法が説明されている。まず、研究方法論として解釈主義的なパラダイムが検討され、データ収集、データ分析法が示されている。

第4章では、板書プロセスにおける教師の意思決定の分析結果が示されている。小学校6年生の社会科・歴史の問題解決学習の授業を対象として、児童の全員の話し合いにおいて教師が児童の発言を要約して板書する過程を分析している。その結果、(1) 教師は児童の発言内容を抽出・要約して板書していること、(2) その際には新規性のある情報を重視していること、(3) 児童の思考を喚起するような意見を重視していることが明らかになった。以上のように知識構成の媒体としての板書によって、教師は児童の議論にはほとんど介入することなく、児童の思考を誘発していた。

第5章では、板書における児童の思考と授業の流れを可視化するための手法を開発している。小学校6年国語の文学作品の授業を対象として、児童の話し合いにおいて、教師がどの順序でどの位置に児童の意見を板書しているかを分析している。黒板の領域を内容のまとまりに注目しセグメントに分け、授業のどの時点でどのセグメントに書いているかをグラフで可視化している。その結果、第1に時間の順序に従い児童の意見には多様性が見られること、第2に教師が意見と意見を関連づけ線や図形で結びつけていること、第3に児童が授業の後半で自発的に前半の話題に復帰して考えを深めていることが明らかになった。児童一人ひとりの意見が板書において尊重されているとともに、相互の考えが板書において関連づけられていた。

論文審査の結果の要旨

また本章の後半では、構成内容を視覚的に表示するための、板書配置図と板書遷移図の作成方法が提案されている。

第6章では、教科等による板書のスタイルを明らかにするために、板書配置図と板書遷移図を用いて、算数・国語・道徳の合計10の授業を分析している。算数の板書は、黒板内に明確に領域が分割され、問いや児童の考えが空白に書き込まれていく構成的なスタイルであり、授業全体を通じて児童の考えの生成を促している。一方、国語の板書は、縦書きで右から左に、上から下へと移動しながら、美しく端的に書かれる一覽的なスタイルであり、児童の内容理解を促している。また、道徳の板書は、ストーリーや児童の意見が整理して書かれる誘発的なスタイルであり、児童の感情と理性的判断を喚起している。

第7章では、第4章から第6章の分析結果を整理し、文化や社会に関する先行研究と関連づけ、日本の教室における文化スクリプトを明らかにしている。第1は、個人志向と協働性の共存である。教師はどの児童の発言も排除するなく、意見を板書している。児童の名前が記されたネームプレートが黒板に貼り付けられることもあり、個人の貢献が強調されている。それとともに、板書によって児童同士の相互作用を促進している。個人を犠牲にする集団主義とは異なる関係性がみられる。第2は、正解の非強調である。正解が定まらない教科の授業では意見の相違が重視され、正解が定まる教科の授業では思考の過程が重視されている。第3は、開放性と構造の連関である。児童は教室で自由に発言できることができ、板書が議論の開放性をもたらしている。それと同時に異論に対しても開かれており、自らの考えを正当化し説明する責任を負っている。生徒たちは、教師たちによって慎重に計画された構造化された有限の空間の中で、安心して自由に動くことができる。さらに、文化歴史的活動理論(CHAT)を援用すれば、板書を共通のツールとして、教師と児童がそれぞれ教授と学習という2つの活動システムにおける主体として関わり合っていることが示される。

第8章では成果のまとめと示唆が示されている。

以上の研究には、以下のような意義が認められる。

- ・日本固有の教育技術である板書に着目し、その特質を実際の実践を分析することをおして明らかにした点。
- ・板書の特徴から教師の意思決定要因を追究し、潜在している文化的要因を顕在化した点。
- ・文化歴史的活動理論を援用しつつ、その理論の拡張し、教師・生徒の双方を主体

論文審査の結果の要旨

とする相互行為をモデル化した点。

- ・授業の逐語記録と板書の内容の変遷を関連づける新たな授業分析手法を開発している点。
- ・解釈学的なパラダイムにおける質的な研究として、観察された事実を文献における多様な見方と関連づけ、独自の知見を産出している点。
- ・戦前の日本の教育における板書についての記述も詳しく、教えるためのツールから学びのためのツールへと拡張してきた経緯が明らかにされ、板書（黒板）を文化的歴史的に理解する上で有益な情報が示されている点。
- ・板書と、パワーポイントやオーバーヘッドプロジェクターの利用とを比較し、機能面から文化面まで深めて問い直すことができている点。
- ・授業に潜在している文化的な構造を明らかにし、自明であるが説明が困難な要因へのアプローチの可能性を開拓した点。

一方、審査委員からは、以下のような課題や疑問が提示された。

- ・地域や学校種などに違いがあるのか。地域による違いが少ないとすれば、なぜ板書の技術と文化が満遍なく浸透しているのか。日本特有の教育制度や風土（教員人事、授業研究、研修）と関連づけることができないか。
- ・板書をセグメントとして分析単位を同定しているが、分析においてそれを設定することの有用性についても説明されるべきではないか。セグメントを同定しようとする行為によって、授業者も気付いていない意味を分析者自身が見出すことができるのではないか。
- ・歴史社会的活動理論(CHAT)を援用した、板書を共有のツールとして教師・児童、教授・学習を上下対称にしたモデルを新たに提示しているが、このモデル図が示す意味や、意図についてさらに説明が必要ではないか。

このような指摘に対して、学位申請者は、研究の課題や限界を十分に認識しており、質疑に対する回答も、適切かつ妥当なものであった。

以上を総合的に判断すると、板書の分析を通して日本の授業における文化的スク립トを明らかにした示唆のある研究と認められるため、審査員は全員一致して「可」と判定した。